

たはら 歴史探訪 クラブ 其の70

TAHARA
History Inquiry
Club

潮騒の伊良湖岬

今回ご紹介するのは、日出園地です。日出園地は、伊良湖ビューホテルの南、眼下に日出の石門や恋路ヶ浜を見渡すことができる景勝地にあります。ここには、昭和36年（1961年）に建てられた「椰子の実の詩碑」と、平成8年（1996年）に大中寅二生誕100年を記念して建てられた歌曲「椰子の実」の記念碑がそろうています。

島崎藤村「椰子の実」の詩、誕生のきっかけとなったのは、日本民俗学の父、柳田（当時は松岡）國男が、明治31年（1898年）の夏に伊良

湖を訪れ、恋路ヶ浜で椰子の実を見つけたことに起因するものであることは、皆さんよくご承知のことと思います。しかしながら、この詩碑が建立される少し前の昭和31年ごろまでは、藤村作詩の源郷がどこであったのかは謎でした。実際、藤村が最初に椰子の実の詩を発表したのは、柳田が伊良湖を訪れた翌年の明治32年であり、その後藤村自身が、この詩のモチーフは「日清戦争に従軍せし人の携へ帰りし椰子椀などよりヒントを得」（長谷川誠一宛葉書、昭和8年6月24日）と述べたため、詩の源郷が伊良湖であるということは長く不明のままだったのです。

ではなぜ、現在のようなことがわかったのでしょうか。それは、昭和31年8月に放送されたラジオ東京「朝の談話室」で、柳田が藤村の作詩した「椰子の実」は、自分が伊良湖で拾った椰子の実がヒントとなつて生まれた旨の発言をしたことからでした。このことを本人に確認したところ、当初は取材拒否だったのですが、昭和27年に発表された柳田の著作『海辺の道』（後に改題『海上の道』）に、椰子の実の記述があることを地元の詩人河合俊郎が見つけ、この事実を柳田自身が認め、長い間、謎

であった藤村の「椰子の実」の詩の舞台が伊良湖であったことが明らかになりました。『海上の道』には、今でも明らかに記憶するのは、この小山の裾を東へまわつて、東おもての小松原の外に、舟の出入りにはあまり使われない四五町ほどの砂浜が、東やや南に面して開けて居たが、そこには風のやや強かった次の朝などに、椰子の実の流れ寄つて居たのを、二度まで見たことがある。（中略）この話を東京に還つて来て、島崎藤村君にしたことが私にはよい記念である。今でも多くの若い人たちに愛誦せられて居る椰子の実の歌というのは、多分は同じ年のうちの製作であり、あれを賞みましたよと、自



二つの碑がそろう日出園地

分でも言はれたことがある。（後略）」と記述されています。

この詩に曲がつけ

られたのは昭和11年（1936年）で、作曲をしたのは大中寅二という人です。東海林太郎の歌唱により、NHKの国民歌謡としてラジオから広く全国に流され、「椰子の実」の歌が誕生したのです。

これらの碑がある広場から西へ降りると、幕末に砲台が築かれた日出砲台跡（太平洋戦争中は伊良湖水道を機雷封鎖するための伊良湖防備衛所跡）があり、さらに階段を降り砲台場を見上げると「牛の首」と呼ばれている地形、浜へ降りきつた所には、陸軍伊良湖射場の監的施設外浜観測所があります。

日出園地、中でも日出砲台跡からの眺望は絶景です。皆さんも一度訪れてみてはいかがですか。（天野）

田原市博物館 22局1720



牛の首と呼ばれる自然地形